



安曇野市の少年サッカーチームを招待して開催された新春少年サッカー大会。多田正見区長のキックオフ



子どもが架け橋となる自治体間連携

毎年、10月に行われる「江戸川区民まつり」は今年で40回目を迎えます。会場では友好都市をはじめ、江戸川区にゆかりのある各都市自慢の特産物を販売しています。また、友好都市から参加している子どもたちがダンスを披露するなどしてステージに華を添え、まつりを一段と盛り上げています。子育てしやすいまち江戸川区は、自治体間交流を次世代に継承しようと、子どもたちが主役となる様々な取り組みを展開しています。

絆を深めて未来にバトン受け継ぐ

区民保養所建設をきっかけに

江戸川区は長野県安曇野市あづみのしと山形県鶴岡市つるおかしの2都市と友好都市盟約を締結しています。

長野県安曇野市（旧穂高町）との交流は、1973（昭和48）年に区民保養施設建設のため、旧有明小学校跡地を穂高町から譲り受けたことにはじまります。穂高町は町をあげて区を歓迎し、将来にわたる相互連携の気運が生まれ、1974（昭和49）年2月に友好都市盟約を締結しました。

区の保養施設である「穂高荘」は開設以来多くの区民に利用され、昨年40周年を迎えました。穂高荘の敷

地に併設されているキャンプ場では、江戸川区子ども会連合会瑞江支部と安曇野市穂高の子ども会との交流「穂高・瑞江親睦キャンプ」（7月）が行われています。1981

（昭和56）年から始まったこの事業は、親子2代にわたって参加していたり、大人になった参加者が指導者として子どもたちを連れて安曇野市を訪れたりするなど交流は受け継がれています。例年3月には江戸川区で「穂高瑞江少年少女交歓会」を開催しており、互いの都市を往來する交流を大切にしています。

「新春少年サッカー大会」には1990（平成2）年から毎年、安曇野市のチームを招待しています。

今年も2チームが参加し、日頃の練習の成果を競い合いました。

また、「江戸川区花火大会」には1976（昭和51）年の第1回から安曇野市の皆さんを招待しています。今年の8月も親子30人が夜空に打ちあがる大輪の花火を楽しみました。

学童疎開の御恩を忘れない

山形県鶴岡市との交流は、太平洋戦争に遡ります。戦争のさなか、江戸川区の多くの子どもたちが鶴岡市とその周辺に疎開しました。温かく



鶴岡市の冬の味覚・どんがら汁を味わえる「寒鰯まつり」

迎えてくれた人々の恩を忘れなかつた区民は、鶴岡市と交流をはじめました。この友情の輪を広げ平和の尊さを語り継ぐため、1981（昭和56）年5月に友好都市盟約を締結しました。学童疎開60周年、70周年の節目には、区内の子どもたちを「平和大使」として鶴岡市に派遣しました。子どもたちは地元の語り部から疎開当時の様子などを聞き、戦争の悲惨さや平和の大切さを学んできました。

1990（平成2）年4月には、鶴岡市の東京事務所「鶴岡江戸屋敷」が西葛西に開館しました。鶴岡市が「城下町夢づくり」の一環として東京に前線基地を設け、現代の江戸屋敷として情報を収集・発信することを計画。区に建設用地あつせんの相談があり、西葛西の区有地を30年契約で賃貸することが決まりました。今では区民にすっかり定着し、区内の人気スポットとして人と情報の重要な交流の場となっています。また、学童疎開関係団体の活動拠点としても利用されています。

この他にも、区内では鶴岡の冬の味覚・どんがら汁を味わえる「寒鰯

まつり」（1月）、鶴岡の方が小学校を訪問し、庄内米の栽培方法を教えてくれる「米づくり授業」（6月）などが行われています。

江戸川区立鹿本小学校と鶴岡市立朝陽第三小学校は、姉妹校盟約を結んでいます。セカンドスクールで5年ごとに鶴岡市を訪問したり、手紙や絵を送り合うなどの交流をしています。

今年の3月には、江戸川区が主催する「関東中学生卓球大会」に安曇野市と鶴岡市の中学生を招待しました。大会前日には、江戸川区と友好都市の生徒たちが合同練習で共に汗を流し、その後の夕食会では、大会本番の健闘を誓い合い友情を深めました。

稚魚を育てて故郷の川に放流

江戸川区では鶴岡市や安曇野市のように息の長い自治体間交流だけでなく、新しい自治体との交流も始めています。

茨城県城里町は2005（平成17）年2月に3町村の合併により誕生した新しい町です。1989（平成元）年から区民まつりに参加して

いた城里町の熱烈なラブコールによつて、近年、お互いのイベントに参加するなど交流がさらに深まっています。

2016（平成28）年11月には、江戸川区子ども未来館のプログラムに参加している児童を対象に、「城里町ワンダーキャンプ」が1泊2日で行われました。現地ではサケの遡上調査や産卵の見学、天体観測、きのこ栽培方法観察などが行われ、子どもたちにとって江戸川区では体験できない思い出づくりとなりました。



ふ化させた稚魚をふるさとへ放流

子ども未来館ではワンダーキヤンプをきっかけに、城里町と提携した活動を進めています。昨年末には地元那珂川漁協から数千個のイクラが届き、未来館利用者の家庭に里親になってもらい、孵化から稚魚に育つまで飼育と観察を続けてもらいました。こうして育てた稚魚は、3月に城里町で行われたイベントで、故郷の那珂川に放流しました。

息の長い取り組みで未来に

友好都市等の自治体間交流には自治体毎に交流の経緯や内容に特徴があります。江戸川区では各都市と育んできた関係を大切にしながら、さらに発展させるために若い世代の交流が重要と考えています。区では以前より友好都市の子どもたちとの交流事業を実施していますが、新たな関係においても子どもが主体となるような事業展開を進めています。

新たな交流が始まったばかりの城里町との交流でも、きつと鶴岡市や安曇野市と同じように子どもたちが自治体間連携の架け橋となり、未来にバトンを引き継ぎ、息の長い交流を続けていくことでしよう。

友好都市が仲介役となった連携 (北海道木古内町)



木古内市で自然体験を楽しむ子どもたち

2016(平成28)年3月26日に開業した北海道新幹線(新青森・新函館北斗間)が青函トンネルを抜けて北海道で最初に停まるのが、木古内駅です。この駅のある北海道木古内町は、江戸川区の友好都市である鶴岡市と姉妹都市関係にあります。その鶴岡市からの紹介で、江戸川区と木古内町との交流が始まりました。

今年7月、江戸川区立下小岩第二小学校の5年生37人が、漁村における自然体験や宿泊体験を通じて現地の人たちと交流する事業に参加しました。江戸川区は都内では自然に触れる機会の多い区ではありますが、農山漁村の生活や文化に触れる機会はあまりありません。江戸川区にとっては子どもたちの貴重な体験や人々との交流ができる一方、木古内町にとっても町の魅力を東京の人たちに伝える絶好の機会となるでしょう。交流自治体が仲介役となる新たな連携が始まっています。